

## バスを釣って駆除する――天才バスとの出会い

片野修

### バスが釣れるか否かは湖沼によってちがう

私は水産研究所でいろいろな仕事をしてき、定年までの約10年間は外来魚担当となって水産庁の事業を統括してきた。その中で、釣りについても一つの駆除技術として取り組んできたが、取り組めば取り組むほど、一筋ならではいかないことがわかってきた。

バス釣りがレジャーとして人気であるために、オオクチバスを釣ることは容易であると、一般の人は思うかもしれない。しかし、オオクチバスはとても賢い魚である。もう少し正確な言い方をすれば、オオクチバスの釣られやすさには個体差があり、どうしても釣れない個体がいる。とくに、一般の釣り人が普段からバスを釣っている場所では、バスはすれていて針に食いつかない。琵琶湖などでは、生きたスジエビを餌にすると、バスは容易に釣り上げることができる。しかし、生きたスジエビに食いつかない湖沼は多い。

私は事業の中で三か所の湖沼を調査地とした。このうち1か所は大勢のバサーが釣りに来る池であり、スジエビで稀に幼魚が釣れることはあったが、ほとんどのバスはスジエビに食いつかなかった。残りの2か所では釣りが禁止されていたが、それでも釣り人がときどき侵入した。このうち、ダム湖ではスジエビやドバミミズでは、一尾も釣れなかった。一方、もう一か所の溜池では、スジエビのほか、ドバミミズやテナガエビでもよく釣れた。

釣れないバスを釣るために、小魚を生きたまま針につける方法を開発し、論文にして公表した。この方法によって、2か所の溜池ではとくに大型魚を効果的に釣ることができるようになったが、ダム湖では釣れないこともないという程度にとどまった。さまざまなルアーを用いても、やはり釣りの効果は乏しく、刺し網や水中銃の方がよく獲れた。このダム湖ではバスはもっぱら昆虫類を捕食していたので、エビや魚には強く反応しなかったのかもしれない。

なお、私はコクチバスも木崎湖や青木湖などの湖沼や千曲川でよく釣ったが、溜池のオオクチバスに比べて釣りやすく感じた。木崎湖や青木湖では、市販のシマミミズを2、3尾針につけて浮き釣りをしていれば、回遊してくるコクチバスを容易に釣ることができた。千曲川ではシマミミズでは釣れないが、畑でとれるドバミミズではよく釣れた。それが種によるちがいか、すれている程度によるのかはわからない。

### 幼魚を釣る方法

オオクチバスは大きくなればなるほど捕獲しにくくなるので、駆除を進めるうえでは、稚魚や幼魚のうちに捕りきってしまうのが効率的である。もちろん、産卵床をつぶすのも有効だが、調査した溜池では、繁殖期が進むにつれてバスは深場で産卵するようになり、そのころには池の水の透明度も低下するために、見逃しが生じやすかった。見逃した稚魚は、大き

なタモ網で捕獲するのだが、深い場所では気が付いた時には、すでに大きくなっており、タモ網では捕れなくなっていることが多かった。

そこで次に幼魚を捕獲することになる。方法としては、カゴ網や目合いが0.8~1.0寸と小さな刺し網をしかけるとよく獲れる。しかし、これらの漁法はしかけていくうちにバスに学習され、やがて獲れなくなる。

そうなるに釣ることになり、生きたスジエビの小型のものを針につけると、3湖沼のうち1か所の溜池では、おもしろいように小バスが釣れた。2,3時間の釣りで、体長が7~10cm くらいのバスが100尾以上釣れたこともあった。しかし、この方法もやがて学習され、バスは釣れなくなった。学習は、一度針にかかったのちバレたり、ほかのバスが釣られるのを見たりして行われると考えられる。

そこで次に行ったのは、ルアーフィッシングであり、プラスチックワームを2~3cmほどに短く切ったものを針につけ、針先を出したうえで、おもりをつけずに池に投入した。リールを使うので、10~20mも投げると、警戒せずにバスは食いついた。しかし、幼魚の口は小さいので、バスが食いついてからすぐに合わせると、すべてばれてしまった。駆除のためのバス釣りでは、バラすということは賢いバスを増やすことになり、極力避けなければならない。そこでバスが食いついてから、10~20m以上引きずっていくの見守ってから合わせるようにすると、針にかけられるようになった。このときにワームにアクションを加える必要はなく、ただ落ちるのを見ていればよい。それでも食わなかったら、ワームが着底してから少し待ち、少しずつ手前にひきずったり、少し煽ったりしてみるとよく食いついた。この場合にも、バスが食いついてからしばらく待ってから合わせることが必要である。

河川ではスジエビよりも、ミミズがよく釣れる。ミミズといっても市販のシマミミズは悔いが悪く、畑でとれるようなドバミミズをターゲットの大きさに合わせて使用するのがよい。テトラなど隠れ場所の近くにバスは集まっている。なお、カワウがいる場合に、バスは昼間には隠れ場所に潜み、夕方に暗くなった時に一斉に隠れ場所から出て、釣れたことがある。

## 未成魚から成魚を釣る方法

次に、未成魚から成魚、体長でいうと15cm以上のバスの釣り方について考えてみよう。この場合も、バスがすれていない湖沼では、生きたスジエビやドバミミズがよい餌となる。このほか、プラスチックワームや魚の形をしたミノルアーを使うと、オオクチバスの未成魚や成魚を簡単に釣ることができるだろう。河川でルアーを用いる場合には、プラスチックワームはバレやすいので勧めない。魚の形をした4~7cm くらいのクランクベイトで、水深が1~2m くらいのところを潜行するものを引くと、ほとんどばれずによく釣れる。

湖沼でバスがすれてくると、クランクベイトやミノーでは食わず、やはりプラスチックワームを錘なしで投入する方法が有効になる。私が溜め池で使っていたワームは3.8インチの

長さで、真ん中に小さめの釣り針をS字状にさした。それを落としたり引いたりすると、ワームが生きているように自動的に動く。しかし、釣り人が多い池では、ワームを用いてもオオクチバスが簡単に釣れるわけではなく、繁殖期の早朝や夕方、あるいは晩秋に釣り人が消えた頃に、ぽつぽつ釣れる程度であった。とくに他の釣り人が大きなルアーを投げて、ぼちゃんぼちゃんと大きな音を立てているようなときには、バスは警戒してしまっているので、釣りをやめたほうがよい。

ワームを投入したらラインを張らずに、どこまでもラインを出す。バスが食いつくと、ワームをくわえて引っ張っていく。このときにスルスルとラインが出ていくので、障害物がない限り、30秒ほど待ってから合わせるとバレない。ラインを張っているときにバスが食いついた場合でも、すぐに合わせずに2、3秒呑み込ませてから合わせるのがよい。ちなみにブルーギルがいる池では、ブルーギルが針にかかるのを避けた方がよい。ラインにピクッ、ピクッと周期的に当たりがある場合には、ほとんどブルーギルがワームに食いついており、すぐにラインを巻いてギルを避けるべきである。バスの場合にはピクッとした当たりがあったとしても、そのあとで静かにラインを引きずっていく。ワームの色は、その湖沼でバスがふだん食べている餌に似せるのがよいだろう。

ワームよりも多くのバスを釣るために、先に述べたように、ウグイやモツゴの体長7~9cmほどの個体を用意し、小さめの針を背びれの前後にとりつけて、小さな玉ウキをつけて湖沼に放す方法を開発した。生きた小魚を餌に釣る方法は海釣りでもよく行われる方法であるが、バスを釣る湖沼では障害物が多いので、長さが8~9mほどの本流竿かアユ竿を用い、こまめに餌魚を誘導することが必要である。また、障害物がない場合には、バスが食いついてもすぐに合わせず、30秒以上、できれば2~3分放置し、完全に飲み込ませることが望まれる。大きな針を使えば、かかりやすいだろうが、それではバスは食い付かない。

この方法で私は体長が60cmを超えるオオクチバスを釣ったことがあり、20~40cmのオオクチバスを1時間に10尾近く釣ったこともある。餌となる生き魚を調達することは、一般人にはむずかしいかもしれないが、水産研究所に勤めていた私には容易だった。あらかじめ、ウグイやアユの幼魚を大量に購入して、それをストック池で飼育していたからである。

ところが、もっともバスを釣りやすい池で、とんでもなく頭の良いオオクチバスに出くわした。あるとき、バスが生き魚に食いついて、ぐんぐん引っ張っていったのち合わせると、餌魚だけ取られていることに気がついた。小さな針を使っているのに、すっぽぬけることもあるだろうと思って、同じ場所に餌魚を投入すると、また餌魚だけ取られてしまう。バスが食ってから合わせるまでの時間を長くして、3~5分くらい待っても、結果は同じだった。日を変えて同じことを試みても、やはり餌魚を取られるばかりだった。私は合わせたときに、いつも一定の重さと抵抗を感じた。これを十回ほど繰り返したのち、私は気が付いた。このバスは餌魚を見つけると、その頭部だけにかみつき、私が合わせるのを待っている。私が力強く合わせれば合わせるほど、針と生き魚が分離し、針だけが私の元に飛んできて、生き魚はバスの口の中に残るというわけだ。生き魚を用いた釣りは、この池のほか五か所の湖沼で

も行い、あわせて 200 尾以上のバスを釣ってきたが、生き魚だけ何度もとられることはなかった。

同じ場所で、同じ個体かどうかはわからなかったが、やはり頭のよいバスに出会ったことがある。繁殖期にそのバスは稚魚を守っていた。岸から 3m くらいのところに 3000 尾ほどの稚魚がいたので、網でとろうにも届かない。そこで私は 5m ほどの長さの釣り竿で稚魚群の沖側の水面を叩いてみた。すると驚いた稚魚は一齐に岸に向かって逃げてきたので、岸に接近したところで 1000 尾ほど掬うことができた。これを繰り返せばバスの稚魚を獲りきることができると思っていたら、稚魚を守っていた雄バスは稚魚の群れをうながして、さらに沖へ連れて行ってしまった。そうなるともうお手上げである。

この場所で最後に私が使った釣り方は、生きたスジエビを針につけ、岸極の植物の間に置いて、そのまま待つという方法であった。あるバサーから、すれて釣れないバスはワームを植物の上に落としてから、動かさないでじっと待っていると釣れることがあると教わったことから思いついた方法である。そして、実際、この方法は時間がかかるが、すれたバスを釣るうえで効果的だった。このほか、アメリカザリガニが多い池では、生きたザリガニの尾に近いところに針をかけ、産卵床の上に置いておくと、オスがよく釣れることがわかった。この場合も、バスがザリガニをくわえてから 5 分程度待ってから合わせるのがよい。

頭のよいバスがいた池では、結局オオクチバスの根絶に成功しなかった。私が定年を迎えることもあって、最後に池の水を抜いて魚を取りだしたところ、オオクチバスの成魚が 3 尾と幼魚が多数、出現した。このことから釣りや網でバスを根絶させることはほぼできないと実感した。根絶するためには、ため池ならば完全に水を抜くのが最善である。水を抜けない湖沼や河川では、電気ショッカーボートを用いるか、透明度が高ければ潜水して水中銃やヤスを使うしかない。いずれにしても、釣りや網だけでバスを根絶させるのは無理である。

## 参考文献

片野修・坂野博之 (2010) 生き魚を餌として用いるオオクチバスの釣り方とその駆除効果。

保全生態学研究 15:183-191

片野修 (2009) 実験池におけるオオクチバスの釣られやすさに見られる個体差。日本水産学会誌 75:425-431